

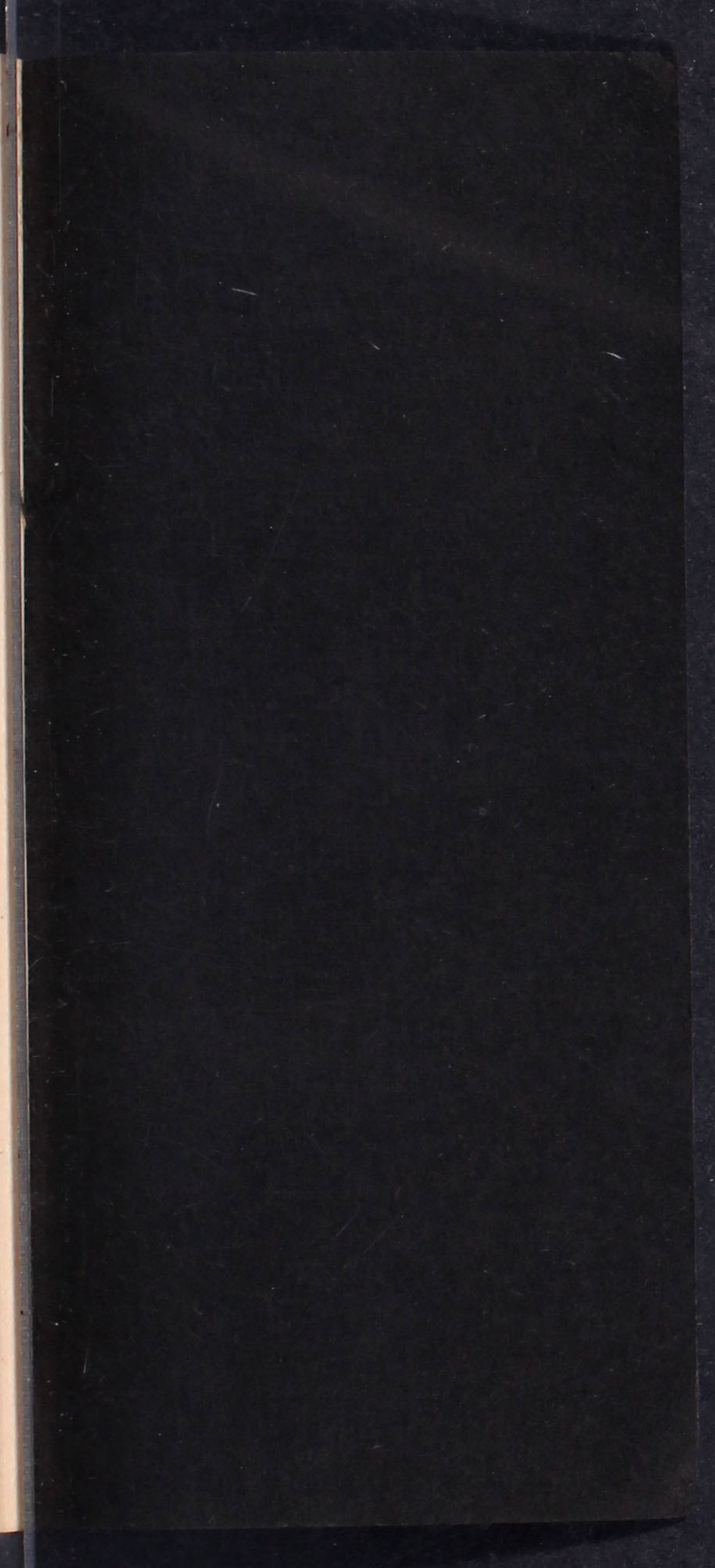
經聖

甘露の法雨



聖
經
甘
露
の
法
雨





卷之二

目錄

一

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

招神歌

生きとし生けるものを生かし給へる御祖神元津靈ゆ幸へ給へ。
吾が生くるは吾が力ならず、天地を貫きて生くる祖神の生命。
吾が業は吾が爲すにあらす、天地を貫きて生くる祖神の権能。
天地の祖神の道を傳へんと願れまし、生長の家大神守りませ。

村



露

のほ

る

雅

まき



『七つの燈臺の點燈者』の神示

○

汝ら天地一切のものと和解せよ。天地一切のものととの和解が成立

するとき、天地一切のものは汝の味方である。天地一切のものが汝

の味方となるとき、天地の萬物何物も汝を害することは出来ぬ。汝

が何物かに傷けられたり、黴菌や惡靈に冒されたりするのは汝が天

地一切のものと和解してゐない證據であるから省みて和解せよ。わ

れ嘗て神の祭壇の前に供へ物を献ぐるとき先づ汝の兄弟と和せよと
教へたのはこの意味である。汝らの兄弟のうち最も大なる者は汝ら
の父母である。神に感謝しても父母に感謝し得ない者は神の心にか
なはぬ。天地萬物と和解せよとは、天地萬物に感謝せよとの意味で
ある。本當の和解は互ひに忭へ合つたり、我慢し合つたりするので
は得られぬ。忭へたり我慢してゐるのでは心の奥底で和解してゐぬ。
感謝し合つたとき本當の和解が成立する。神に感謝しても天地萬物

に感謝せぬものは天地萬物と和解が成立せぬ。天地萬物との和解が成立せねば、神は助けたりとも、争ひの念波は神の救の念波を能う受けぬ。國恩に感謝せよ。汝の父母に感謝せよ。汝の夫又は妻に感謝せよ。汝の子に感謝せよ。汝の召使に感謝せよ。一切の人々に感謝せよ。天地の萬物に感謝せよ。その感謝の念の中にこそ汝はわが姿を見、わが救を受けるであらう。われは全ての全てとあるからすべてと和解したものの、中にのみわれはゐる。われは此處に見よ、

彼處に見よと云ふが如くにはゐないのである。だからわれは靈媒に
は憑らぬ。神を靈媒に招んでみて神が來ると思つてはならぬ。われ
を招ばんとすれば天地すべてのものと和解してわれを招べ。われは
愛であるから、汝が天地すべてのものと和解したとき其處にわれは
顯れる。(昭和六年九月二十七日夜神示)

時が來た。今すべての病人は起つことが出来るのである。最早、

あなたにとつて病氣は存在しない時が来たのである。二千年前、キリストが『汝の信仰によつて汝の信ずる如くなれ』と云ふ唯一語で、遠隔の地にある病人を癒やした其の真理が、すべての人類に開顯される時期が来たのである。『生長の家』を読み真理を知るだけで遠くにて病氣が治る事實を見よ。『生長の家』は今かの歌示録が尋言した『完成の燈臺』として人類の前に臨むのである。此の燈臺より真理の光を受くるものは、創世記のエデンの樂園追放以後人類を

悩なやましたところの『罪つみ』と『病やまひ』と『死し』との三暗黒あんこくを消盡せうじんするの
である。光ひかりが近付ちかづくとさすべての暗黒あんこくは消える。『真理しんり』が近ちかづく
時とき、すべての『迷まよひ』が消える。『迷まよひ』が消える時とき、『迷まよひ』の産物さんぶつな
る『罪つみ』と『病やまひ』と『死し』とは消える。疑うたがはずに吾わが光ひかりを受けよ。

われは『完成えいせいの燈臺とうだい』に燈あかりを照てんするものである。(昭和六年一月十五日神示)

經聖
甘露
の
法
雨

神

或る日天使生長の家に来りて歌ひ給ふ――

創造の神は

五感を超越してゐる、

六感も超越してゐる、

聖せい

しじやう

至上

無限むげん

宇宙うちう

を貫く心つらぬ ころ

宇宙うちう

を貫く生命つらぬ せいめい

宇宙うちう

を貫く法則つらぬ ほうそく

真理しんり

くわらみやら

光明

智慧ちゑ

絶対の愛あひ

これらは大生命だいせいめい

絶対の神の真性しんせいにして

神かみがあらはるれば乃すなはち

善ぜんとなり、

義ぎとなり、

慈じ悲ひとなり、

調てう和わおのづから備そなはり、

一切さいの生物處せいぶつところを得えて争あらそふものなく、

相^{あひ}食^はむものなく、

病^やむものなく、

苦^{くる}しむものなく、

乏^{とほ}しきものなし。

神^{かみ}こそ^{すべ}禪^ての禪^{すべ}て。

神かみは渾すべてにましまして絶ぜつ對たいなるが故ゆゑに

神かみの外そとにあるものなし。

神かみは實じつ在ざいのすべてを蔽おほふ。

存そん在ざいするものにして

神かみによつて造つくられざるものなし。

神かみが一切さいのものをつくりたまふや

粘土ねんどを用ひ給はず、

木材もくざいを用ひ給はず、

槌つちを用ひたまはず、

鑿のみを用ひたまはず、

如何いかなる道具だうぐも材料ざいれうも用ひ給はず、

たゞ「心」をもつて造りたまふ。

「心」はすべての造り主、

「心」は宇宙に満つる實質、

「心」こそ「全能」の神にして遍在したまふ。

この全能なる神。

完くわんぜん全ぜんなる神かみの

「心こころ」動うごき出いでててコトバとなれば

一切さいの現象げんじやう展開てんかいして萬物ばんぶつ成なる。

萬物ばんぶつはこれ神かみの心こころ、

萬物ばんぶつはこれ神かみのコトバ、

すべてはこれ靈れい、

すべてはこれ心こころ

物質ぶつしつにて成なるものひとの一つもなし。

物質ぶつしつはたゞ心こころの影かげ

影かげを見て實じつ在ざいと見みるものはこれ迷まよひ。

汝なんぢら心こころして迷まよひに捉とらはるゝこと勿なかれ。

汝らなんち「實在」じつざいは永遠えいゑんにして滅ほろぶることなし。

「迷」まよひは須臾しゆゆにして忽たちまち破摧はさいす。

「實在」じつざいは自在じざいにして苦惱くるしみなし

「迷」まよひは捉とらはれの相すがたにして苦患くげん多おほし。

「實在」じつざいは真理しんり、

「迷」まよひは假相かりのすがた

實在じつざいは五官くわんを超越てうゑつし

第六だいい感かんさへも超越てうゑつして

人々ひとの感かん覺かくに映えいずることなし。

靈れい

感かん覺かくはこれ信しん念ねんの影かげを視みるに過すぎず。

汝なんぢら靈れい眼がんを備そなへて靈れい姿しを視みるとも

實在じつざいを視みたるに非あらず、

感覺かんかくにて視得みうるものは

すべて心こころの影かげにして第一だい義ぎ的てき實在じつざいにあらざ、

靈姿れいしに甲乙かふおつあり、

病やめる靈れいあり、

苦くるしめる靈れいあり、

胃袋ゐぶくろもあらざるに胃病ゐびやうに苦しめる靈れいあり、
心臓しんざうも有もたざるに心臓病しんざうびやうにて苦しめる靈れいあり、

これすべて迷まよひなり。

斯かくの如ごとき靈れい、人ひとに憑よれば
憑よられたる人ひと或あるひは胃病ゐびやうを顯あらはし、

或あるひは心臓病しんざうびやうを顯あらはす。

されど靈覺れいかくに映えいずる

さまぐの苦くるしめる靈れいは、

第一だい義的實ぎてきじつざい在ざいにあらず、

彼かれらは誤あやまれる信しん念ねんによりて

流る轉てんせる迷まよひの影かげなり。

迷まよひ迷まよひて流る轉てんせる心こころは

その信念しんねんが形かたちとなりて假かりの相すがたを現げんずべし。

されど如何いかに相すがたを現げんずることも

假かり相のすがたは永遠えいゑんに假か相さうにして實じつ在ざいとなることを得えず。

汝なんぢら、實じつ在ざいにあらざる物ものを恐おそるゝこと勿なかれ、

實じつ在ざいにあらざる物ものを實じつ在ざいせるが如ごとく扱あつかふこと勿なかれ。

實じつ在ざいにあらざる物ものには實じつ在ざいをもつて相あひたい對たいせよ。

真しんにあらざるものには真しんをもつて相對あひたいせよ。

假かりのすがた相たいに對たいしては實相じつさうを以もつて相對あひたいせよ。

闇やみに對たいしては光ひかりをもつて相對あひたいせよ。

非實ひじつざい在ざいを滅めつするものは實じつざい在ざいのほかに在あらざるなり。

假かりのすがた相たいを破やぶるものは實相じつさうのほかに在あらざるなり。

虛妄こまうを壞ゑするものは真理しんりのほかに在あらざるなり。

闇やみの無むを證明しょうめいするものは光ひかりのほかに在あらざるなり。
彼かれらに生命せいめいの實相じつさうを教をしへよ。
彼かれらに生命せいめいの實相じつさうが神かみそのものにして完全くわんぜんなる事こと
を教をしへよ。

神かみはすべてなるが故ゆゑに
神かみは罪つみを作つくらざるが故ゆゑに

神かみのほかに造つくり主ぬしなきが故ゆゑに

此この世界せかいに犯をかされたる罪つみもなく

報むくいらるべき罪つみもなきことを教をしへよ。

三界がいの諸しよ霊れい

三界がいの諸しよ生せい命めい

この真しん理りを觀くわんじ、

この真理しんりをささごりて、

一切さいくげん苦患みなもとの源みなもととならるべき

顛倒てんたう妄想まよひを摧破さいはすれば、

天界てんがいの諸神しよじんことごとく真理しんりの合唱コーラスを雨あめふらし、

現世このよの生命せいめいことごとく光ひかりを仰あふぎ、

惑障わくしやうことごとく消滅せうめつし、
此世このよはこの儘まゝにて光明くわうみやう

世界せかいを示現じげんせん。

物ぶつ

質しつ

汝なんぢら感かん覺かくにてみとむる物ぶつ質しつを

實じつ在ざいとなすこと勿なかれ。

物ぶつ質しつはものもの實じつ質しつに非あらず、

生せい命めいに非あらず、

真理にあらず、

物質ぶつしつそのものには知性ちしやうなく

感覺かんかくなし。

物質ぶつしつは畢竟ひつきやうむ『無』にしてそれ自身じしんの性質せいしつあることなし。

これに性質せいしつを與あたふるものは『心』こころにはほかならず。

『心』こころに健康けんかうを思おもへば健康けんかうを生しやうじ、

「心」に病を思へば病を生ず。

そのさま恰も

映畫の舞臺面に

力士を映せば力士を生じ

病人を映せば病人を生ずれども。

映畫のフィルムそのものは

無色透明にして本来力士も無く

病人も無く

たゞ無色透明の實質の上を蔽へる

印畫液によりて生じたる色々の模様が、

或は力士の姿を現じ、

或は病人の姿を現ずるが如し。

されど健康なる力士も

虚弱なる病人も

印畫液の作用によりて生じたる

影にして實在に非ず。

汝ら若し活動寫眞の映寫機に

印畫液によりて生じたる色々の模様なき

無色透明むしよくとらめいのフィルムを掛けて

舞臺面スクリーンにこれを映寫えいしやすれば、

やがて老おいて死しすべき健康けんかうなる力士りきしもななく

虚弱きよじやくなる病人びやうにんは無論むろんなく

たゞ舞臺面スクリーンにあるものは光明くわうみやうそのもの、

生命せいめいそのものにして

かくしゃく
赫灼かくしゃくとして照てり輝かどやかん。

なんぢいま
汝なんぢら今いまこそ知しれ、

なんぢ
汝なんぢらの『生命せいめい』は健康けんからなる力士りきしの生命せいめい以上いじやうのものな
ることを。

い
如何いかなる健康けんからなる力士りきしも
かれ
彼かれが肉體にくたいを實在じつざいと觀み、

肉體にくたい即すなはち彼かれなりと觀みる以上いじやうは

彼かれは滅ほろぶる者ものにして眞しんの『健康けんかう』に非あらざるなり。

眞しんの『健康けんかう』は物質ぶつしつに非あらず、肉體にくたいに非あらず、

眞しんの『生命せいめい』は物質ぶつしつに非あらず、肉體にくたいに非あらず、

眞しんの『汝なんぢそのもの』は物質ぶつしつに非あらず、肉體にくたいに非あらず。

物質ぶつしつの奥おくに、

肉體にくたいの奥おくに、

靈妙れいめうきはまりなく完全くわんぜんなる存在そんざいあり。

これこそ神かみに造つくられたる儘まゝの完全くわんぜんなる

「汝なんぢそのも

の』にして、

常住じやうちゆう健康永遠不滅けんかうえいゑんふめつなる「生命せいめい」なり。

汝なんぢら今いまこそ物質ぶつしつを超越てうゑつして

汝なんぢ自身じしんの『生命せいめい』の實相じつさうを自覺じかくせよ、

實じつ 在ざい

天てん使のつかひ また續ついでいて説とき給たまはく——

實じつ在ざいはこれ永えい遠えん、

實じつ在ざいはこれ病やままず、

實じつ在ざいはこれ老おいいず、

實在じつざいはこれ死しせず、

この真理しんりを知しることを道みちを知しると云いふ。

實在じつざいは宇宙うちうに満みちりて缺かけざるが故ゆゑに道みちと云いふ。

道みちは神かみと俱ともにあり、

神かみこそ道みちなり、實在じつざいなり。

實在じつざいを知しり、實在じつざいに住をるものは、

消滅せうめつを超越てうゑつして
常住じやうぢゆう圓相ゑんさうなり。

生命せいめいは生せいを知しつて死しを知しらざ。

生命せいめいは實在じつざいの又またの名な、
實在じつざいは始はじめなく終をりなく、

滅ほろびなく、死しなきが故ゆゑに、

生命せいめいも亦また始はじめなく、終をりなく、

亡ほろびなく、死し滅めつなし。

生命せいめいは時じ間かんの尺しゃく度どのうちにあらず

老朽らうきうの尺しゃく度どのうちにあらず、

却かへつて時じ間かんは生命せいめいの掌しやうち中ちゆうにあり。

これを握にぎれば一てん点てんとなり。

これを開ひらけば無む窮きゆうとなる。

若わかしと思おもふ者ものは怒たちまち若わか返かへり。

老おいたりと思おもふ者ものは怒たちまち老おい朽くつるも宜むべなるかな。

空間くうかんも亦また決けつして生せい命めいを限か定ぎるものにはあらず。

空間くうかんは却かへつて生せい命めいの造つくりたる「認にん識しきの形けい式しき」にすぎず。

生命せいめいは主しゅにして空間くうかんは従じゆうなり。

空間くうかんの上に投影とうえいされたる

生命せいめいの放射ほうしゃせる観念くわんねんの致あや、

これを稱しょうして物質ぶつしつと云いふ。

物質ぶつしつは本来ほんらい無むにして

自性じしやうなく力ちからなし。

これに性質あり、

また生命を支配する力あるかの如き観を呈するは
生命が「認識の形式」を通過する際に起したる「歪み」

なり。

汝ら、この「歪み」に捉はれることなぐ、
生命の實相を正観せよ。

生命せいめいの實相じつさうをし知るもの者は
因縁いんねんを超越てらあつして生命せいめい本來ほんらいの歪ゆがみなき圓相えんさう的てき自由じいうを
獲得くわくとくせん。

智ち

慧え

智慧ちえはこれ本來ほんらい神かみのひかり、
實じつ在ざいに伴ともなふ圓相えんさう的てき光ひかりなり、

それは無量光、
むりやうくわう

無邊光にして局限なし、
むへんくわう
かぎり

局限なきが故に
かぎり
ゆゑ

一切のものに満ちて
さい
み

一切のものを照し給ふ。
さい
てら
たま

人間は光の子にして常に光の中にあれば
にんげん
ひかり
こ
つね
ひかり
なか

暗きを知らず。
くら
し

躓つまづきををし知らず。

罣さはりををし知らず。

かのてん天人にんがてん天界かいをいら遊行からするがこと如く

またかい海魚ぎよがすゐ水中ちゆうをいら游泳えいするがこと如く

光ひかりのせ世界かいにひかり光みにみ満みたはされは法ふ悦えつにみ満みたはされて遊いら行からす。

智慧ちゑはこれ悟さとりの光ひかりにして、

無明まよひの暗やみを照破せうはする真理しんりなり。

真理しんりのみ實在じつざい、

無明むみやうはたゞ悟さとらざる真理しんりにして

これを喩たとへば惡夢あくむの如ごとし。

汝なんぢら惡夢あくむを觀みることなかれ。

悟さとればたちま怒こち此この世せ界かいは光くわう明みやう樂らく土どとなり、
人にん間げんは光くわう明みやう生せい命めいなる實じつ相さうを顯けん現げんせん。

神かみは無む量へん光くわう、無む邊へん光くわうの智ち慧ゑ、

かかぎりなき善ぜん、

かかぎりなき生せい命めい、

一切さいのものゝ實質じつしつ

また一切さいのものゝ創造主つくりぬし

されば神かみは一切さい所しよに遍在へんざいし給たまふ。

神かみは遍在へんざいする實質じつしつ且かつ創造主つくりぬしなるが故ゆゑに

善ぜんのみ唯一ゆゑの力ちから

善ぜんのみ唯一ゆゑの生命せいめい

善ぜんのみ唯一ゆゑの實在じつざい、

されば善ぜんならざる力ちからは決けつして在あることなし、

善ぜんならざる生命せいめいも決けつして在あることなし、

善ぜんならざる實在じつざいも亦また決けつして在あることなし。

善ぜんならざる力ちから即すなはち不幸ふかうを來きたす力ちからは畢竟ひつぎやうあくじ惡夢あくむに過す

ぎせず。

善ぜんならざる生命せいめい即すなはち病やまひは畢竟ひつきやう惡夢あくむに過すぎず。
すべての不調ふてう和わ不完ふくわん全ぜんは畢竟ひつきやう惡夢あくむに過すぎず。
病氣びやうき、不幸ふかう、不調ふてう和わ、不完ふくわん全ぜんに積極せききよく的てき力ちからを與あた

へたるは吾われらの惡夢あくむにして、

吾われらが夢中むちゆうに惡魔あくまに壓おさへられて苦くるしめども
覺さめて觀みれば現實げんじつに何なんら吾われらを壓おさへる力ちからはなく

吾れと吾が心にて胸を壓へるるが如し。

まことや、惡の力、

吾らの生命を抑へる力、

吾らを苦しむる力は

真に客觀的に實在する力にはあらず。

吾が心がみづから描きし夢によつて

吾れわと吾わが心こころを苦くるしむるに過すぎず。

佛ほとけの道みちではこれまよひを無明まよひと云いひ

神かみの道みちではこれつみを罪つみと云いふ。

完くわん全ぜん圓ゑん滿まんの生せい命めいの實じつ相さうをささことららざらるが故ゆゑに無まよひ明ひ

と云いふ。

完くわん全ぜん圓ゑん滿まんの生せい命めいの實じつ相さうを包つみみて顯けん現げんせしめざらる

が故ゆゑに罪つみけがれと云いふ。

無ま明ひ

かく天てん使つかひ生長せいぢやうの家いへにて歌うたひたまふ時とき、

一人ひとりの天てんの童子どうじあらはれて問とひを設まうけて云いふ。

願ねがはくは人々ひとぐのため、人々ひとぐのさとりのため、

無明まよひの本質ほんしつを明あきらかになしたまへ」と。

かく天使生長の家にて歌ひたまふ時、
一人の天の童子あらはれて問ひを設けて云ふ。
願はくは人々のために、人々のさとりのために、
無明の本質を明かになしたまへ」と。

天使答へて云ふ――

無明はあらざるものをありと想像するが故に無明なり。

真相を知らざるを迷と云ふ。

快苦は本来物質の内^{うち}に在らざるに、
物質の内^{うち}に快苦ありとなして、

或あるひは之これを追おひ求もとめ、

或あるひは之これより逃にげまごふ、

かゝる顛倒妄想てんだうまうざうを迷まよひこ云いふ。

生命せいめいは本ほん來らい物質ぶつしつのううちちにああらざるに

物質ぶつしつの内うちに生命せいめいありこなす妄まう想ざうを迷まよひこ云いふ。

本ほん來らい物質ぶつしつは心こころの内うちにあり。

心こころは物質ぶつしつの主しゅにして、
物質ぶつしつの性質せいしつ形態けいたいはことごとく心こころの造つくるところな
るにもかゝはらず、

心こころをもつて物質ぶつしつに支配しはいさるゝものと誤信ごしんし

物質ぶつしつの變化へんくわに従したがつて

憂苦いうくし懊惱おうなうし、

われどわがせいめい生命のまんまんくわんぜん圓滿完全なるじつさう實相をさと悟ること

を得えざるを迷まよひと云いふ。

迷まよひはしんじつ眞實のはんたい反對なるがゆゑ故にむみやう無明なり。

迷まよひはじつざい實在にはん反するがゆゑ故にひじつざい非實在なり。

迷まよひ若もしじつざい實在するものならば

迷まよひよりしやう生じたる

迷よりの生したる
憂^{いう}苦^くも懊^{あう}惱^{なう}もまた實^{じつ}在^{ざい}ならん。

されど、迷^{まよひ}は實^{じつ}在^{ざい}の虚^{きよ}なるが故^{ゆゑ}に

憂^{いう}苦^くも懊^{あう}惱^{なう}もたゞ覺^さむべき惡^{あく}夢^むにして實^{じつ}在^{ざい}には

非^{あら}ざるなり。

罪^{つみ}

「罪^{つみ}は實^{じつ}在^{ざい}なりや?」とまた重^{かさ}ねて天^{てん}の童^{どう}子^じは問^とふ。

天使てんのつかひの答こたふる聲こゑ聞きえて曰いはく、

すべて眞實しんじつの實在じつざいは、

神かみと神かみより出いでてたる物もののみなり。

神かみは完全くわんぜんにして、

神かみの造つくりたまひしすべての物ものも完全くわんぜんなり。

然しからば問とはん。汝なんぢは罪つみを以もつて完全くわんぜんとなすや？

此の時と天てんの童子どうじ答こたへて曰いはく――

『師しよ、罪つみは完全くわんぜんに非あらず』と。

てんのつかひ

天使てんし また説とき給たまふ――

罪つみは不完ふくわんぜん全ぜんなるが故ゆゑに實じつざい在ざいにあらず、

病やまはは不完ふくわんぜん全ぜんなるが故ゆゑに實じつざい在ざいにあらず、

死しは不完ふくわんぜん全ぜんなるが故ゆゑに實じつざい在ざいにあらず、

汝なんぢら神かみの造つくり給たまはざるものを實じつざい在ざいとなすなかれ。
在あらざるものを惡あく夢むに描えがきて恐きよう怖ふすること勿なかれ。

罪つみと病やまひと死しとは

神かみの所しよざう造さうに非あらざるが故ゆゑに

實じつざい在ざいの假か面めんを被かうむりたれども

非ひ實じつざい在ざいなり、
虚こ妄まうなり。

我われは此この假か面めんを剥はいて
罪つみと病やまひと死しとの非ひ實じつ在ざいを明あきらからにせんが爲ために來きた

れるなり。

嘗かつて釋しや迦か牟む尼に如に來よもこの爲ために來きたりたまへり。

嘗かつてイエスキリストもこの爲ために來きたりたまへり。

若もし罪つみが實じつ在ざいならば

十方ばうの諸佛しよぶつもこれを消滅せうめつすること能あたはざるなり。

イエスキリストの十字架じかもこれを消滅せうめつする事能ことあた

はざるなり。

されど汝なんぢら幸さいひなるかな、

罪つみは非實ひじつざい在いにして迷まよひの影かげなるが故ゆゑに、

十方ばうの諸佛しよぶつも

衆生しゅじやうを攝取せつしゅしてよく罪つみを消滅せうめつしたまへり。

イエスキリストも

たゞ言葉ことばにて『汝なんぢの罪赦つみゆるされたり』と云いひてよく

罪つみを消滅せうめつしたまへり。

われも言葉ことばにて

『生長せいちやうの家いへの歌うた』を書かかしめ、

言葉ことばの力ちからにて罪つみの本質ほんしつを暴露ばくろして、
罪つみをして本ほん來らいの無むに歸きせしむ。

わが言葉ことばを讀よむものは

實じつ在ざいの實ほん相とのをす知たるが故ゆゑに

一切さいの罪つみ消滅せうめつす。

わが言葉ことばを讀よむものは

生命せいめいの實相ほんとのすがたをし知るが故ゆゑに

一切さいの病消滅やまひせうめつし、

死しを越こえて永遠えいゑんに生いきん。

人にん間げん

吾われは『真理しんり』なり、

真理しんりより遣つかはされたる天使てんのつかひなり。

『真理』

より照りかゞやく

『光』なり。

迷を照破する『光』なり。

吾れは『道』なり。

吾が言葉を行ふものは道にそむかず。

吾れは生命なり。

吾れに汲む者は病まず死せず。

吾れは救なり、

吾れに頼む者はここごとくこれを攝取して寶相

の國土に住せしむ。

天使かくの如く説き給へば

天の童子また重ねて問ふ。

師よ、人間の本質を明かになし給へ。」

天使てんのつかひ 答へたまはく——

人間にんげん は物質ぶつしつ に非ずあら、

肉體にくたい に非ずあら、

腦髓ならずゐ 細胞さいぼう に非ずあら、

神經しんけい 細胞さいぼう に非ずあら、

血球けつきゅう に非ずあら、

血清けつせいに非あらず、

筋肉きんにく細胞さいぼうに非あらず、

それらすべてを組くみ合あはせたるものにも非あらず。

汝なんぢら、よく人間にんげんの實相じつさうを悟さとるべし、

人間にんげんは靈れいなり、

生命せいめいなり、

不死ふしなり。

神かみは人間にんげんの光ひかり源のみなもとにして

人間にんげんは神かみより出いでてたる光ひかりなり。

光ひかりの無なき光源くわらげんはなく、

光源くわらげんの無なき光ひかりはなし。

光ひかりと光源くわらげんとは一體たいなるが如ごとく

光と光源とは一體なるか

人間にんげんと神かみとは一體たいなり。

神かみは靈れいなるが故ゆゑに

人間にんげんも亦また靈れいなるなり。

神かみは愛あいなるが故ゆゑに

人間にんげんも亦また愛あいなるなり。

神かみは智慧ちゑなるが故ゆゑに

人間にんげんも亦また智慧ちゑなるなり。

靈れいは物質ぶつしつの性せいに非あらず。

愛あいは物質ぶつしつの性せいに非あらず。

智慧ちゑは物質ぶつしつの性せいに非あらず。

されば、

靈れいなる愛あいなる智慧ちゑなる人間にんげんは、

物質ぶつしつに何なんら關かんはるかところなし。

まことの人間にんげんは、

靈れいなるが故ゆゑに、

愛あいなるが故ゆゑに、

智ち慧ゑなるが故ゆゑに、

生命せいめいなるが故ゆゑに、

罪つみを犯とがすこと能あたはず、

病やまひにかゝること能あたはず、

死し滅めつすること能あたはず、

罪つみも、

病やまひも、

死しも、

死も
ひつきやうなんぢ
畢竟 汝らの悪夢に過ぎず。

なんぢ せいめい
汝ら生命の實相を自覺せよ。

なんぢ じつさう
汝らの實相たる「真性の人間」を自覺せよ。

しんせい じんげん
「真性の人間」は神人にして

かみ すがた
神そのまゝの姿なり。

ほろ じんせい じんげん
滅ぶるものは「真性の人間」に非ず。

罪を犯すものは「真性の人間」に非ず。
病に罹るものは「真性の人間」にあらず。

地上の人間よ、

われ汝らに告ぐ、

汝ら自身の本性を自覚せよ。

汝ら自身は「真性の人間」にして、

そのほかの如何なるものにも非ず。

されば人間は真理の眼より見る時は

罪を犯す事能はざるものなり、

病に罹る事能はざるものなり、

滅ぶること能はざるものなり。

誰か云ふ「罪人よ、罪人よ」と。

神かみは罪人つみびとを造り給つくはざるが故ゆゑに

この世よに一人ひとりの罪人つみびともあらず。

罪つみは神かみの子この本ほん性に反はんす、

病やまひは生命せいめい其それ自身しんの本ほん性に反はんす、

死しは生命せいめい其それ自身しんの本ほん性に反はんす、

罪つみと病やまひと死しとは、

畢ひつ竟きやう存そん在ざいせむざちるゆうものををま夢よ中ひにの描かけげるま妄よ想ひにの過かぎげずす。
實じつ相さうのせ世かい界かいにお於いては
神かみとひ人とはた一たい體なり、
神かみはく光わう源げんにして
人にん間げんはか神かみより出いてたるひ光かりなり。

罪つみと病やまひと死しとが

實在じつざいするると云いふ惡夢あくむを、

人間にんげんに見みせしむる根本こんぽん妄想まうざうは、

古ふるくは、

人間にんげんは塵ちりにて造つくられたりと云いふ神學しんがくなり。

近ちかくは、

人間は物質にて造られたりと云ふ近代科學なり。
これらは人間を罪と病と死との妄想に導く最初
の夢なり。

この最初の夢を摧破するときは
罪と病と死との
根本原因は摧破せられて

その本^{ほん}來^{らい}の無^むに歸^きするなり。

汝^{なんぢ}ら「生長^{せいちやう}の家^{いへ}」を讀^よんで真^{しん}理^りを知^しり病^{やまひ}の癒^いゆるは

この最^{さい}初^{しよ}の夢^{ゆめ}の摧^{さい}破^はせらるゝが故^{ゆゑ}なり。

最^{さい}初^{しよ}の夢^{ゆめ}無^なければ

次^{つぎ}の夢^{ゆめ}なし。

悉^{ことごとく}く夢^{ゆめ}なければ本^{ほん}來^{らい}人^{にん}間^{げん}清^{しやう}淨^{じやう}なるが故^{ゆゑ}に

罪つみを犯をかさんんと欲ほつするも

罪つみを犯をかすこと能あたはず、

悉ことごとくく夢ゆめなければ自性無病じしやうむびやうなるが故ゆゑに

病やまひに罹かゝらんと欲ほつするも

病やまひに罹かゝること能あたはず、

悉ことごとくく夢ゆめなければ本来永ほんらい生かぎりなきいのちなるが故ゆゑに死滅しめつす

ること能はず。あた

されば地上ちじやうの人間にんげんよ

心を盡こころつくして自己じこの靈れいなる本體ほんたいを求めよ、もと

これを夢ゆめと妄想まうざうとの産物さんぶつなる物質ぶつしつと肉體にくたいとに求もと

むること勿なかれ。

キリストは

「神かみの國くには汝なんぢらの内うちにあり」と云いひ給たまへり。

まことまこと誠まことに誠まことにわれ汝なんぢらに告つげん。

「汝なんぢらの内うち」とは汝なんぢら「人間にんげんの自性じしやう」なり、「真しんの人にん

間げん」なり。

「汝なんぢらの内うち」即すなはち「自性じしやうは」神人しんじんなるが故ゆゑに
「汝なんぢらの内うち」にのみ神かみの國くにはあるなり。

外そとにこれを追おひ求もとむる者ものは夢ゆめを追おひて走はしる者ものにして

永遠えいゑんに神かみの國くにを得うる事こと能あたはず。

物質ぶつしつに神かみの國くにを追おひ求もとむる者ものは

夢ゆめを追おうて走はしる者ものにして

永遠えいゑんに神かみの國くにを建たつる事こと能あたはず。

キリストは又また云いひ給たまへり、

『吾が國は此の世の國にあらず』と。

此の世の國は唯影にすぎざるなり。

常樂の國土は内にのみあり。

内に常樂の國土を自覺してのみ

外に常樂の國土は其の映しとして顯現せん。

内に無限健康の生命を自覺してのみ

外そとに肉體にくたいの無限健康むげんけんかうは其その映しうつごとして顯現けんげんせん。

人間にんげんの五官くわんはたゞ「映しうつの世界せかい」を見みるに過すぎず。

「映しうつの世界せかい」を淨きよめんと欲ほつすれば心こころの原げん版ばんを淨きよめて迷まよひをてんのぞの汚點をを除のぞかざるべからず。

われ誠まことに物質ぶつしつの世界せかいの虚むなしきを見みたり、

物質ぶつしつの世界せかいが影かげに過すぎざることを見たりみ。

われはまた人間にんげんが神かみより放射はうしゃされたる光ひかりなる事こと

を見たりみ。

肉體にくたいはたゞ心こころの影かげなる事實じじつを見たりみ。

汝なんぢら、物質ぶつしつは移うつりかはる影かげにすぎざること

恰あたかも走馬燈そうまとうに走はしる馬うまの如ごとし。

されば、影かげを見てみて實在じつざいとなすことなかれ。

人間にんげん真性そのものはこれ神人しんじん、

永遠えいゑん不壞ふゑ不滅ふめつの靈體れいたいにして

物質ぶつしつをもつて造り固めたる機き械かいにあらず、

また物質ぶつしつが先まづ存ぞんしてそれに靈れいが宿やどりたるもの

にもあらず、

斯かくの如ごとき二元論げんろんは悉ことごとくく誤あやまれり。
物質ぶつしつは却かへつてこれ靈れいの影かげ、心こころの産物さんぶつなること、
恰あたかも繭まゆが先まづ存そんざい在ざいして蠶かひこがその中なかに宿やどるには非あら

ずして、

蠶かひこが先まづ糸いとを吐はきまて繭まゆを作つくり
繭まゆの中なかにみづから蠶かひこが宿やどるが如ごとし。

人間にんげんの真性しんせいは先まづ靈れいなる生命せいめいにして

心こころの糸いとを組くみ合あせて肉體にくたいの繭まゆを造つくり

その繭まゆの中なかにわれと吾わが靈れいを宿やどらせて、

はじめことばて靈ことばは肉體にくたいとなことばるなり。

汝なんぢら明あきらかに知しれ、繭まゆは蠶かひこに非あらず、

然しからば肉體にくたいは人にんげん間まに非あらずして、

にんげん まゆ

然らば肉體は人間に非ずして

人間の繭に過ぎざるなり。

時來らば蠶が繭を食ひ破つて羽化登仙するが如く、

人間もまた肉體の繭を食ひ破つて靈界に昇天せん。

汝ら決して肉體の死滅をもつて人間の死となす勿れ、

人間は生命なるが故に

常に死を知らず。

想念こころにしたが従したがひ

時ときにしたが従したがひ

必要ひつえうにしたが従したがひて

肉體にくたいと境遇きやうぐうに様々さまざまの狀態じやうたいを顯あらはせあらごごも、

生命せいめいそのものは病やむに非あらず、

生命せいめいそのものは死しするに非あらず、

想念こころを變かふることによつて

よく汝なんぢらの健康けんかうと境遇きやうぐうとを變かふること自在じざいなり。

されど汝なんぢら、

つひに生命せいめいは肉體にくたいの齧まゆを必要ひつえうとせざる時とき到いたらん。

かくの如ごときごき、

生命せいめいは肉體にくたいの齧まゆを食くひ破やぶつて

一層自在の境地に天翔らん。

これをもつて人間の死となすなかれ。

人間の本体は生命なるが故に
常に死することあらざるなり。

かく天使語り給ふとき、

虚空こくうには微妙みめうの天樂てんがくの聲聞こまきこえ

葩はなびらは何處いづこよりともなく雨あめふりて

天てんの使つかひの説とき給たまへる眞理しんりをば

さながら稱たよふるものゝ如ごとくなりき。

せいぎやうをばり
(聖經終)

願ねがはくは此この功徳くどくを以もつて普あまねく一切さいに及およぼし、

我われ等らと衆生しゅじやうと皆みな俱ともに實相じつさうを成じやうぜんことを。

(一)

海の深さは全する。
海の深さは全する。
海の深さは全する。
海の深さは全する。
海の深さは全する。

(二)

海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。

海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。

海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。

海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。

海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。
海は深しと云ふ。

見を相實

(一)

神はすべての中のすべて、
神は完ら生命、
神は完ら睿智、
神は完ら聖愛。

すべてのものゝ内に、
神の生命は生くる、
神の睿智は生くる、
神の聖愛は生くる。

神はすべてにして、
すべて一體なれば、
よろづもの皆共通の
ちから是を生かせり。

天地の創造主は、
唯一つの神にませば、
天地はたと一つに、
いと妙に調和満つる。

吾れ坐す妙々實相世界
吾身は金剛實相神の子
鳥づ圓滿大調和、
光明遍照實相世界。



歌るす

(二)

神は生命にして、
吾れは神の子なれば、
吾れはすべてを生かし
すべては吾れを生かす。

神は愛にして、
吾れは神の子なれば、
吾れはすべてを愛し、
すべては吾れを愛す。

神は智慧にして、
吾れは神の子なれば、
吾れはすべてを知り、
全てのもの吾れを知れり。

神はすべてにして、
吾れは神の子なれば、
吾れ祈れば天地應へ、
吾れ動けば宇宙動く。

吾れ坐す妙々實相世界
吾身は金剛實相神の子
萬づ圓滿大調和
光明 遍照實相世界。



(一) 夫は人の心を動かすに
能く、世を治むるに
能く、天を覆ふに
能く、地を履くに
能く、

世を治むるに能く、
天を覆ふに能く、
地を履くに能く、
夫は人の心を動かすに
能く、

夫は人の心を動かすに
能く、世を治むるに
能く、天を覆ふに
能く、地を履くに
能く、

(二) 夫は人の心を動かすに
能く、世を治むるに
能く、天を覆ふに
能く、地を履くに
能く、

世を治むるに能く、
天を覆ふに能く、
地を履くに能く、
夫は人の心を動かすに
能く、

夫は人の心を動かすに
能く、世を治むるに
能く、天を覆ふに
能く、地を履くに
能く、

“KANRO NO HŌU” Published
By The Kōmyōshisō-Fukyūkai
Tokyo, Japan.

昭和十二年五月二十九日印刷
昭和十二年六月三日發行

著者 谷口雅春

東京市澁谷區澁谷三丁目七六

發行所 服部仁郎

東京市豊島區千川町三ノ四三三六

印刷者 大居倉之助

東京市小石川區白山御殿町十八

發行所 株式會社 光明思想普及會

東京市赤坂區澁谷町五番地



